

Tomoko
OHMORI

plays

Chopin

Chopin with Sand at Nohant

Sonata,
Vales,
Ballade,
Mazurkas,
Barcarolle

Chopin:

ショパン:

Piano Sonata No.3 in B minor Op.58

ピアノ・ソナタ 第3番 短調 作品58

- ① Allegro maestoso (8:54)
- ② Scherzo. Molto vivace (2:37)
- ③ Largo (8:37)
- ④ Finale. Presto, non tanto (5:04)

3 Valses Op.64

ワルツ

- ⑤ Valse No.6 in D-flat major Op.64-1
“Petit chien”
第6番 変ニ長調「小犬」作品64-1 (1:36)
- ⑥ Valse No.7 in C-sharp minor Op.64-2
第7番 嬰ハ短調 作品64-2 (3:24)
- ⑦ Valse No.8 in A-flat major Op.64-3
第8番 変イ長調 作品64-3 (2:47)

⑧ Ballade No.4 in F minor Op.52

バラード 第4番 短調 作品52
(10:18)

3 Mazurkas Op.59

マズルカ

- ⑨ Mazurka No.36 in A minor Op.59-1
第36番 短調 作品59-1 (3:40)
- ⑩ Mazurka No.37 in A-flat major Op.59-2
第37番 変イ長調 作品59-2 (2:38)
- ⑪ Mazurka No.38 in F-sharp minor Op.59-3
第38番 嬰ハ短調 作品59-3 (2:49)
- ⑫ Barcarolle Op.60
舟歌 嬰ハ長調 作品60 (8:30)

Tomoko OHMORI, piano

(Hamburg Steinway D Type No.417990, 1970)

大森智子 (ピアノ)

2000年1月13,14日
三鷹市芸術文化センターに於ける録音セッション

Date: Jan., 13, 14, 2000
Location: Mitaka City Arts Center, Tokyo, Japan

Director: Takashi Mitsukawa
Engineer: Kazumi Ohkubo
Piano Tuner: Atsushi Usui
Photographer: Tsutomu Fujinoki
Designer: Takanori Sugii

Special thanks to Naoki Ishikawa

ショパンとサンド

谷澤由起子

その時、となりの部屋からピアノが聞こえてきた。ショパンのバラード1。好きな作品だったから耳をすませた。ミスタッチのない正確さ、それに情緒と理性がほどよく配分されて、あまりにも魅力ある演奏ぶりだったので、弾き手が誰か知りたくて、歩いていったのをおぼえている。それが智子さんと初対面だったが、もう今から20年も前のこと。しかし、あの若さで、あの完成度の高さは何だったのだろうか？

共通の知人が多かったことから、以来、永いおつきあいとなった。女二人のおしゃべりにしては、あまり世間的な楽しみに触れることもなく、ワイングラスを持ちながらも、専ら真面目な話題ばかりだった。なかでもショパンとサンドについては最もひんぱんに繰り返したテーマである。いずれ、一緒にノアーンへ……と言いつつ、お互い忙しくて延ばしていたところ、去年、彼女だけ先に行ってしまった。素敵なお土産をいただいたものの、私の垂涎は止まっていない。

フレデリック・フランソワ・ショパンが、ジョルジュ・サンド（本名、アマンティース・オーロール・リュシル・デュパン）と出会ったのは、1836年の秋、リストの紹介だった。もっと早い時期に会うこともできた二人だったが、サンドが、このワルシャワから来たハンサムな青年に早くから興味を持っていたのに対し、ショパンのほうは、男装姿で、男の名をペンネームにして、男性遍歴でもスキャンダルの絶えない女流作家に、嫌悪感すら抱いていたため、出会いを避けていたためだった。それでも、やがて歴史に残る恋に発展するのだから、わからないものである。当時サンドが送りつけたラブレターの束を見ると、「on vous adore」と、間接的に、短く、しかも効果的に達筆がしたためられてある。ショパンでなくとも、ある種の感動を覚える出来である。

恋愛関係に入った二人は、サンドの故郷であるノアーンの城で暮らしはじめる。ここには画家や詩人、音楽家、作家など、さまざまな分野で活躍する芸術家が出入りしていた。ショパンにとって、ノアーンは、心を癒す理想の場であると同時に、創作の刺激を受ける場でもあった。彼

の全人生の代表作品は数多くここで作曲されている。彼の繊細な指先が奏でる華麗なテクニック、官能的な旋律は、恋する男性の頭脳と心臓から生み出されたはずである。ただ、サンドは、男まさりで、支配的だという評判は、あまりに彼女に気の毒である。友人だったポーリース・ヴィアルド（サンドの古い友人、当時有名なオペラ歌手、ツルゲネフの生涯の恋人としても知られる。）の伝記を読むと、サンドは本当に献身的に城を訪れる客たちに尽くした、とある。みんなを滞在させる費用は、すべてサンドが原稿で捻出した。それゆえ、彼女は、めずらしく多作な小説家にもなった。子供たちや、友人たちに尽くすという点では、立派な母性本能の持ち主だった、とその伝記にも書かれている。それに、物語のなかにあふれる、美しい自然を賛美することばの素直さ、人の心情を描くときの繊細な筆づかいを見るかぎり、評判とは全く違う、やさしい女としてのサンドの実像が浮かび上がるのである。

実生活でも、二人の子供の母親であったサンド。特に、上の息子のモーリスは体が弱く、彼女の愛情を独占した時期があった。彼のリュウマチの治療のために選んだ避寒地というのが地中海のマジョルカ島だったが、のちにサンドとショパンの恋の逃避行として有名になってしまった。娘のソランジュは寂しさの救いをショパンに求める。ショパンも、彼女の気持ちを理解する。少しずつ傷ついていくショパン。マジョルカからショパンが友人に宛てて出した手紙には、青い空、オリーブの林、オレンジの香……と、詩的な言葉が並んでいるが、サンドは、同じ友人に、煙たい暖炉と、堅いベッドを不満げに書き送る。ノアーンに帰っても、心の距離は戻らない……。

ノアーンの時代は、二人の愛の円熟期でもあり、衰退期でもあった。そして、ショパンにとっては、最も傑出した作品が生まれた頃でもあった。

智子さんは、冒頭に書いたように、初めから完成したピアニストだったが、今回年代を経たピアノを使用したことで、ショパンとサンドの存在がより身近に感じる事ができたし、いちだんと素晴らしくなった演奏から、20年の歳月が確実に彼女の人生を密度の濃いものに仕上げたことが感じられた。この上は、欲張りなファンとしては、これから、サンドほど奔放でなくても、ときには苦しい恋などして（旦那さま、ごめんなさい！）、万華鏡のような音色をピアノに弾き込めたい……と考えている。

（たにざわ・ゆきこ／旅行作家、日本旅行作家協会常任理事）

■ 曲目について

柴田龍一

F.F. ショパン (1810-1849)

● ピアノ・ソナタ 第3番 短調 作品58

「鍵盤の詩人」などと呼ばれるショパンは、ロマンティックで繊細なピアノのための小品を数多く作曲した反面、大作の創作を好んだとはいえず、こうした領域では少数の作品を残しているにすぎない。しかし、彼の手から生まれたピアノ・ソナタやピアノ協奏曲は、彼が大作を書くのが得意ではなかったという見方を覆すに十分な作品であり、そこには、小品の作曲家という先入観に捉われがちなショパンに潜む別の魅力や側面が写し出されている。一方、ショパンは、その生涯に全部で3曲のピアノ・ソナタを残しているが、彼の死後の1851年に出版された第1番は、17歳の時のいわば習作とでもいうべき作品であり、これといったアピールに欠けているため、演奏される機会には殆んど恵まれていない。しかし、第3楽章に有名な「葬送行進曲」をもつ第2番とそれから約5年後に完成された第3番は、共に円熟の境地に達したショパンの筆から生み出された

作品であり、いずれもショパンを代表する傑作の1つとして親しまれている。ところで、ショパンの作品には、既成の形式感から自由な形態を示すものが少なくないが、この第3番は、彼の作品としては珍しいほどまでに形式の整っているソナタであり、有機的な統一感や完成度の高さを誇る構造的な特徴とするまでに至っている1曲である。また、ショパンの音楽といえば、多くの小品にみられるようなセンチメンタルで女性的なイメージが想起されがちな傾向を有しているが、このソナタに於いては、この作曲家に秘められたもう1つの側面である壮大な構力や力強い情熱なども最高度に発揮されている。そして、そのような多面的な音楽的内容がショパン本来の持ち味といえる甘美でデリケートな魅力と共に調和を保ちながら1曲のなかに包み込まれていることは、このソナタならではの特徴であり、聴きどころでもあるといっていよいだろう。この作品は、1844年の夏にジョルジュ・サンドのノアーンに住居で作曲されたものであり、E. ドゥ・ペルトゥイ伯爵夫人に献呈されている。

第1楽章 アレグロ・マエストロ、ソナタ形式による楽章であり、序奏部は置かれておらず、冒頭で直ちに呈示される雄渾で重々しい第1主題と、それとは対照的に抒情的で流

れるような美しさを特色とした第2主題を軸にして組み立てられている。再現部こそは多少変則的であるが、それ以外ではソナタ形式の定石に従った進行をみせており、2つの主題が有機的に処理された展開部の見事な構成力は、なかでも印象深いものになっている。

第2楽章 スケルツォ、モルト・ヴィヴァーチェ、3部形式による通常のスタイルのスケルツォであり、スピーディな動きで綴られた主部と、和声的な書法による情緒豊かな中間部から構成されている。

第3楽章 ラルゴ、3部形式による緩徐楽章であり、そこで繰り広げられる甘美さの極致を感じさせるようなノクターン風の音の世界は、夢見のような恍惚とした表現によって聴き手を魅了せずにはおかない。

第4楽章 フィナーレ、プレスト・マ・ノン・タント、やや変則的な Rond 形式によるフィナーレであり、A—B—A—B—A—コーダという構造によっている。激情的で輝かしいフィナーレであり、この大作の最後を締め括るにふさわしい華麗な盛りあがりを見せ、作品をドラマティックな結末に導く。

●3つのワルツ 作品64

ショパンは、紛失したと考えられる何曲か

を除外しても、全部で19曲ほどのワルツを残している。そして、この19曲は、本来は踊りのための実用音楽にしかすぎなかったワルツに演奏会用の魅力的な音楽としての新しい装いを与えたものとして、特筆されるべき作品である。一方、3曲のワルツから成るショパンの作品64は、1846年からその翌年にかけて作曲されたものであり、以下のような3曲から成っている。

ワルツ 変ニ長調 作品64の1「小犬のワルツ」、ショパンの愛人のジョルジュ・サンドは、1匹の小犬を飼っていたが、その小犬には、自分の尻尾を追ってぐるぐると回る習癖があった。このワルツは、それを音楽で表現して欲しいというサンドの要望から生まれたと伝えられている。この作品は、デルフィーヌ・ポトッカ伯爵夫人に献呈されている。

ワルツ 嬰ハ短調 作品64の2、特に傑作として名高い1曲であり、独特の憂うつな情緒が印象深いワルツになっている。この作品は、ロスチルド男爵夫人に献呈されている。

ワルツ 変イ長調 作品64の3、晩年の所産にもかかわらず、明るく輝かしい性格が目を引きワルツになっている。この作品は、カテリーネ・ドゥ・ブラニツカ伯爵夫人の献呈されている。

●バラード 第4番へ短調 作品52

ショパンは、全部で4曲のバラードを残しているが、健康がいたく害されていた晩年のショパンの筆から生まれたこの第4番は、ポーランドの詩人アダム・ミツキエヴィッチのある3人の兄弟をうたった詩から着想されたといわれる作品である。このバラードは、磨き抜かれた抒情美、ドラマティックな演奏効果、変幻自在で巧妙な書法など、ショパンが生涯の終わり近くに到達した独自の音の世界を強く印象づける作品になっている。1842年に完成されたこの作品は、シャルロット・ドゥ・ロスチルド男爵夫人に献呈されている。

●3つのマズルカ 作品59

マゾヴィア地方に起源をもつといわれるマズルカは、ポロネーズと共に最も郷土色の濃いポーランドの郷土舞曲の1つであるが、ショパンは、そのマズルカのもつ郷土舞曲としての特筆を十二分に尊重しながらも、そこに大胆な即興性や豊かな幻想性、垢抜けた西歐的感覚などを盛り込み、独創的で普遍的な芸術作品としてのマズルカを生み出している。3曲のマズルカから成るショパンの作品59は、1845年に作曲されたものであり、以下のような3曲から成っている。

マズルカ イ短調 作品59の1、3部形式によるマズルカで、ハネカーが絶賛した傑作であり、新鮮で独創的な表現が光る作品になっている。

マズルカ 変イ長調 作品59の2、3部形式によるマズルカであり、旋律の美しさが特にきわ立っている作品になっている。

マズルカ 嬰へ短調 作品59の3、3部形式によるマズルカで、多彩な表情の機微が見事な傑作であり、ショパンのマズルカのなかでも特に秀れたものの1つに数えられている。

●舟唄 嬰へ長調

舟唄の典型的なスタイルは、ヴェネツィアの gondola の船頭の歌にみられる8分の6拍子の形態に沿ったものである。しかし、ショパンの豊かな想像力は、それを8分の12拍子にモディファイすることによって、さらに流麗なメロディ・ラインを描き出すことに見事な成功を収めている。ショパンは、舟唄を生涯に1曲しか残していないが、この1曲は、晩年の所産であるだけに細部に至るまで磨きに磨きあげられた優美で繊細な作品になっており、デリケートでキメ細やかな味わいにも溢れている。1846年の夏に完成されたこの作品は、ストックハウゼン男爵夫人に献呈されている。

この作品の構造については、それを既成の形式にあてはめることには無理があるが、強いといえば、序奏とコーダが付加された極めて自由で変則的なソナタ形式とみることも不可能ではない。

■このアルバムについて

大森智子は、東京芸術大学と同大学院を経てロンドンやニューヨークに留学し、マリア・カナルス国際コンクールやヴィオッティ国際コンクールで金メダルを受賞したピアニストである。1977年にデビューリサイタルを開催した彼女は、それから意欲的な演奏活動を行ないながら現在に至っているが、1998年5月にラフマニノフの作品を取めたアルバムでCDデビューを飾った彼女は、1999年10月にはバッハの平均律クラヴィーア曲集第1巻をリリースし、不等分律1/6を採用した初の録音であるこのアルバムによって大きな話題を巻き起こし、広く注目を集めることになった。そうした彼女は、1999年の秋にショパンの没後150年を記念して「ノアーンのショパン」というテーマの二夜にわたるリサイタルを開催したが、ノアーン時代のショパンの名作がプログラミング

されたこのアルバムは、そのリサイタルに引き続いて録音されたものである。大森は、明快でメリハリの効いたデッサンでくつきりとした作品の輪郭を描き出し、ダイナミックな造型的美観を特色とした表現を聴かせるピアニストであるが、そこには、常に深くふくよかな情緒やホットな感情表現もが息づいており、それは、彼女ならではのロマンティックでありながらも格調の高い演奏を実現させる結果をもたらしている。そして、このアルバムに聴く彼女のショパンは、彼女のそのような持ち味が強く前面に押し出された演奏内容になっているが、そこでレアリゼされている高貴でありながらも想い入れの深い表現は、この演奏に接した筆者に作品の魂に触れた演奏のみがもたらしてくれる生々しい感動を確かに授けてくれたのである。さらに大森は、ここで意図的に少し古い年代のピアノを使用してその特有の音色を生かすことにより、自己の音楽表現の独自性をより強固で鮮明なものにしているが、彼女のひたむきな情熱と高い理想が結実した成果といえるこのショパンは、聴き手にホットな感情を与えてくれることであろう。

(柴田龍一)



大森智子(ピアノ)

Tomoko Ohmori, piano

東京芸術大学附属高等学校を経て、同大学音楽学部器楽科(ピアノ専攻)卒業。
同大学院修了。1976年、スペイン、バルセロナにおけるマリア・カナルス国際コンクール
及び、1997年、イタリア、ヴェルチェリにおけるヴィオッティ国際コンクールに入賞。
以後、主にロンドン、ニューヨークで学ぶ。

鈴木まさを、高良芳枝、松浦豊明、井口秋子、田崎悦子、
ペーター・ソリモッシュ、マリア・クルチオの各氏に師事。

1987年から1992年にかけてブルーノ＝レオナルド・ゲルバー氏より
来日の度毎に指導を受け、薫陶を得る。

1977年にリサイタル・デビュー以来、ソロ、室内楽などの活動をはじめ、
ショパンを中心としたロマン派及びそれ以降のプログラムと、
バッハ・プログラムによるものでほぼ毎年リサイタルを開催。

特に1988年にはバッハ・バルティータ全6曲を一晩で演奏。

1999年秋、2夜に渡り「ショパン没後150周年～ジョルジュ・サンドとの愛の軌跡」を
朗読及びチェロと共に好演。

1998年5月、ナミレコードよりラフマニノフ「前奏曲集」をファーストCDとしてリリース、
翌99年10月、バッハ「平均律第1巻」(全曲)をバッハ没後250年に先がけてリリース、
いずれもレコード芸術誌上、準推薦及び推薦盤として取り上げられる。

1997年より東京・一番町(スペースKホール&ギャラリー)において
「スペースKピアノ・サロン」を主宰し後進の指導にもあたっている。



Chopin:

ショパン:

Piano Sonata No.3 in B minor Op.58

ピアノソナタ 第3番 短調 作品58

- ① Allegro maestoso (8:54)
- ② Scherzo. Molto vivace (2:37)
- ③ Largo (8:37)
- ④ Finale. Presto, non tanto (5:04)

3 Valses Op.64

ワルツ

- ⑤ Valse No.6 in D-flat major Op.64-1
"Petit chien"
第6番 変ニ長調「小犬」作品64-1
(1:36)
- ⑥ Valse No.7 in C-sharp minor Op.64-2
第7番 嬰ハ短調 作品64-2 (3:24)
- ⑦ Valse No.8 in A-flat major Op.64-3
第8番 変イ長調 作品64-3 (2:47)

⑧ Ballade No.4 in F minor Op.52

バラード 第4番 短調 作品52
(10:18)

2000年1月13,14日
三鷹市芸術文化センターに於ける
録音セッション

Date: Jan., 13, 14, 2000
Location: Mitaka City Arts Center, Tokyo, Japan
Director: Takashi Mitsukawa
Engineer: Kazumi Ohkubo
Piano Tuner: Atsushi Usui
Photographer: Tsutomu Fujinoki
Designer: Takanori Sugii
Special thanks to Naoki Ishikawa

3 Mazurkas Op.59

マズルカ

- ⑨ Mazurka No.36 in A minor Op.59-1
第36番 イ短調 作品59-1 (3:40)
- ⑩ Mazurka No.37 in A-flat major Op.59-2
第37番 変イ長調 作品59-2 (2:38)
- ⑪ Mazurka No.38 in F-sharp minor Op.59-3
第38番 嬰ヘ短調 作品59-3 (2:49)

⑫ Barcarolle Op.60

舟歌 嬰ヘ長調 作品60 (8:30)



Tomoko
OHMORI,
piano

(Hamburg Steinway D Type
No.417990, 1970)

大森智子(ピアノ)



COMPACT
disc
DIGITAL AUDIO

WWCC-7371

(LN3314)

STEREO

DIGITAL
RECORDING

Made in JAPAN

Manufactured by
NAMI RECORDS
Co., Ltd. JAPAN

2-11-3-202 Kamiohsaki,
Shinagawa-ku, 141-0021
Tokyo, Japan.
phone 03-3440-5542

このディスクは権利者の許諾なく
貸貸業に使用することを禁じます。
また無断でテープその他に録音す
ることは法律で禁じられています。

制作:ライヴノーツ
発売元:ナミ・レコードCo.,Ltd.

税込定価 ¥2,835
(税抜価格 ¥2,700)